

古い伝統につながっていくように思われます。しかしそれについて論ずるためにはまた改めて別の機会が必要でありましょう。私の今日の講演は、これで終わらせていただきます。長い間ご清聴ありがとうございました。

一九八四年一月二五日、愛知県産業貿易会館、ならびに河合塾千種校において、河合文化教育研究所主催、フランス大使館後援のもとに「シンポジウム・青年の現在（パリ―名古屋）」が開かれました。ここに刊行するのは当日、中川久定氏によって行われた特別講演の記録に、あとから同氏が手を加えられたものです。

なお、当日の演題は、「デイドロの今日性」でしたが、ここでは「デイドロの（現代性）」に改められています。

河合文化教育研究所

## 解説

若き日の思いは一生を貫き、生き方を決定するか

牧野 剛

### 1

一人の人間を、他人に「紹介する」ことは、二つの意味で困難な作業であると言えよう。

その一つは、紹介すべき人を誰もが知っている時は、世間に行き渡っている彼のイメージを越える内容を提供することは極めて難しく、結局はなくてもがなの、細かなエピソードの羅列に終りがちであり、また、逆に、その紹介すべき人が一部のみにしか知られていない場合は、どのような説明がなされようと、読者の中にイメージが成立していかないで、紹介されるべき人と紹介すべき者とが親しければ親しい



だけ、普遍性の欠けた独断に近いものになるからである。

もっと本質的にいえば、一人の人間を、他の人間が、言語を通して紹介することの可能、不可能性の問題も出てくるであろう。そのときわれわれは他人を言語で紹介するという二重の隘路に立たされることになる。

ここでは、そうした困難を承知の上で、本書を手にするであろう、特に若い読者諸子に、中川氏を「紹介する」としたら、どのような方法が可能となるであろうか。

一般的な意味では、氏はデイドロ、ルソーという一連の一八世紀フランス思想家、文学者の研究者であり、京都大学文学部で仏文学を教える教授であり、専門家の間では、精緻な実証分析で知られ、文学史を思想史の方にひろげ、思想史のなかに文学史をとりこむような、これまで試みられなかった独創的な領域を開拓しつつある国際的なデイドロ研究者である。

しかし、先に述べた点からすれば、氏はジャーナリストに有名であるわけではないので、一般の読者にはなじみが少ないと思われる。それ故、大学時代に氏にフランス語の初歩を習い、その後も指導生として公私にわたるつき合いをさせていただいている僕はもちろん、氏の生活や思想の細部やエピソードもかなりの程度には知っているのであるが、自分の怪しげな感想をここに書きつけることを良しとし

ないものである。むしろ、ここでは、氏をめぐる第三者の文章と、氏の著書からの引用を中心にして、氏を理解するための一つののぞき穴を提示するということで、「紹介」の役割りをはたしたいと考えるものである。

## 2

ここに、たとえば次のような文章がある。これは京大の学生時代の氏を同窓生の小説家豊田善次が描写したものである。

《一海、高橋のほかにフランス文学専攻の中川がハNSTに参加したのは意外に思われた。時代に深い関心を持つ人らしかったが、表立って活動することのなかった無党派の学生だったから。無口な人柄のようで、痩せた頬が意志的に引きしまり、瞑想するかに見えて動かない横顔に、一海、高橋とはまたちがった一つの峻烈な精神を感じた。かれは三キロはあろうかと思われ、青い革表紙の原書を持ち込んでいた。……ハNSTの現場で聖者のような厳しい静けさを示したのは中川であった。……かれは一日目から、衰弱が加わるまで、頑固に例の分厚い大判の原書を膝の上にひろげて読みつづけていた。あれは何です



か」と私はそこにいる者にたずねた。「ヴォルテールの原書らしい」と教えてくれた。二日目も、三日目も、かれの姿は石のように動かなかった。」

(『高橋和巳の回想』)

これは、京大「天皇事件」での処分を求めて、ハンストに入った京大生中川氏の、豊田善次の理解した姿である。この場面は、その後一時代を風靡した天折の小説家高橋和巳が、このハンストの中心にいたことによって、偶然に記憶―記録されたものである。ここで、同世代の学生たちに受け取られた中川氏の像は、「無口」「意志」「峻烈」「頑固」等々の言葉で表わされるものであったことが分かる。

また、そのすこし後、中川氏はフランスへ留学するのであるが、その留学の帰りの船の中で行き会った小説家の辻邦生は、留学の記録『空、そして永遠』の中で、中川氏が語った話として、次のように書いている。

《「僕の家は公家華族ではなく武家華族でした。……故郷は九州の大部分の竹田というところで、滝廉太郎が『荒城の月』の曲をつくった古城は、実は、ほくの家の城なのです。……僕のなかに、何の実体もない、しかし厳然とある『家』の

抽象化されたイデーが頭のなかにつくられてゆきました。……みたされぬものをみたくてくれたのは桑原(武夫)さんの実証主義的な方法でした。……」僕は、中学(旧制)四年のときの同人雑誌に……こんなことを書いたことがある。『人間は科学だ、文学だ、芸術だ』と知っているがすべてむなし。……人生でゲーテのように山脈のような人間形成をすることが唯一の生き方にちがいない。……失恋などもあり、僕は生きてゆく関心、物との強い関係を次第に失っていききました。……「二度の自殺未遂の後」結局一年おくらせて「大学を」卒業し、大学院に入り、……フランスにいったわけです。「自殺未遂の」あとで、……井村恒郎という医者のところに行きましたが、この人は……「僕について」『過度のアイデアリゼーション』『不安』『不断の内的活動』『抑圧された攻撃性』の四つの特徴をいってくれました。》

この、小説家の筆になる、若き日の中川氏の像は、「家」の重さや、自己のアイデンティティに苦しむ青年の特徴をみごとに描き出している。そしてこれが同時に、その後の中川氏の研究の方向や内容を、底部から規定する、原像となっているように思われる。



僕たちが、これら一連の文章から確認しておきたいのは、少くとも中川氏の同世代の連中には、彼は「無口」「意志」「瞑想」等の言葉で考えられており、そして、精神科の医師には、「アイデアリゼーション」「不安」「抑圧」「攻撃」「内的」等の語彙で表わされる状態の中に彼があつたことである。

そうした状態は、中川氏自身の語るところ（辻の書きとつた）によれば、殿様の「家」という歴史の重みでできしんだ繊細な魂が強烈な自己意識の過剰によってむしばまれて作り上げられたものであり、氏の後の研究には、この若い日の精神状況の刻印が、色濃く浮び上ってくるのである。これら氏をとりまく、あるいは氏に内在する精神状況が、柔らかく繊細な魂をもった人間に耐えがたいものであつたことはまちがいない。では、これをどう救いどう止揚するか。

結局この問題意識が、彼の「他者」「作品」理解、そして後に触れるような「絶対の読者」「永遠の幸福」といった言葉に示される彼の研究方法と目標を決していったといえるであろう。

## 3

中川氏が、『自伝の文学』という著書の中で、「自伝とは……自分たちが生きた一



回限りの生の軌跡を後世に——後世というのは、すでになん度か説明しましたように絶対の読者のことです——伝えたいという願望です」と書く時、とりあえず「絶対の読者」とはどのような者かはさておくとしても、少くとも、中川氏が、へ自己を語ることへ、へ自分を対象化することへを、「後世」との関係において問題にしていることは明らかであろう。先の辻邦生に語つたという行為も、実はその後、研究として行なわれたことに近いものではないか。同じ著書の中で、次のように書かれていることで、それは確かめられる。それは、外界に疎しさを感じ取ってしまう繊細な魂が、自己を、時間を越えて救済しようとする作戦ではないのか。

《自伝とは……過去の自分を描き出しながら、しかもその過去を自分の永遠の願望に従って意味付け、そしてそれを未来に差し出していくジャンルである、と定義できるように思います。》

ここでも、過去を未来へと転化しつつなぐ意図の下に、「自伝」が考えられていることは明瞭であろう。とすれば、他者の「自伝」にこだわりつづける中川氏は、同時に自己の「自伝」的なものにも強く引かれているのではあるまいか。というより、

ルソー、スタンダールなどの他者の自伝を理解、研究する中に、氏の、自己をどう救済するかという主題が投影されているといえるのではないだろうか。

そして、次のような「他者」——「作品」理解の方法を書きつける中川氏を読むとき、それは同じ方向で理解されるであろう。

氏は、すでに死んでしまったり、直接的に個人として知り得なかった他者を、ディドロがどのように理解しようとしているかを、一つの定式として提出する。

《セネカの苦悩 = デイドロの苦悩》①  
セネカ

∴ セネカの苦悩 = セネカ × デイドロの苦悩 —— ②  
ディドロ

……ディドロによって描き出されたセネカの苦悩は、ディドロがセネカと同一化（投射的同一化）しつつ、自分自身が味わったセネカと類比的な経験を表現したものである、と。》

（『人類の知的遺産』『ディドロ』）

当然、この中川氏の①式が成立するためには、どの一人を取り上げたとしても、人間は等価的である。あるいは、自己の方がより現実的存在であろうけれども、どうしようもなく強く引きつけられてしまう他者——それらは現世的には不幸な者であることが多いが——の存在も、自分自身と等価であるという前提が必要となる。

そして、人間が異質な他者と同一化したうえで、すなわち、他者の精神状態を自分の中に読み込んだと確信した上で、他者を理解する、ということとは、結局、自分の深層を読むということである。これが、氏に一貫している作品に対する方法、たといえよう。では読まれるべき氏の自己の深層とは何か——。それは、先述した氏の若き日の精神状況がどのように立ち現われるそのものところ、つまり、対人、対家族、対社会関係において必ずしも幸福でなかった繊細な魂の苦悩の根源というようなものといったらいいのであろうか。故に、また、他者に向けて同一化するのとは逆の方向で、自己の深層にあるものと同じものをディドロやルソーのうちに見出すことが氏の方法の中に組みこまれていて、それが氏の研究を、ある地平を抜くのびきならない緊張に満ちたものになっている、といえるだろう。

それでは、中川氏はこうしたことを通して、極めて精緻な史料批判を基礎に、何をめざして研究を進めようとしているのであろうか。そのことを暗示するものが、



「絶対の読者」「永遠の願望」ではないか。それらの言葉は、「永遠の今」という西田幾多郎の言葉を思い起こさせるものである。他の場所でも、次のように書いているのが見られる。

《……希望の中核には、自分たちの生に与えてくれたもの、すなわちこの生がほんとうに生きるに値したという実感を与えてくれたもの——「完全な幸福」の体験——を、永遠化したいという欲求が潜んでいます。》

(『自伝の文学』)

この「完全な幸福」の「永遠化」こそ、先に書いた、「永遠の読者」「永遠の願望」と深い関係にあるものであると考えられよう。とすれば、中川氏の目指しているものは、自己の、現在の、瞬間的な「幸福」を、「永遠」の「幸福」として、普遍的なものとして把握することとならぬであろうか。そして、その「幸福」は、西欧的な自我構造と強い関係を持っていることも、次の箇所を確認できる。

《……対象と融合した持続的な状態のなか、あらわれてくるルソーの平安な幸

福感と、対象を前にして魂が魂そのものの外に飛び出した瞬間に出現してくるスタンダールの激烈な幸福感は、確かに非常に異なっています。しかし彼らとともに、平常の自我の堅い防壁が破れ、日常的自我を喪失した時になって初めてほんとうの幸福の境地——ほんとうの自我の根拠——に到達することができたのでした。そしてその点においてこそ彼ら二人は完全に共通しているといえるのではないのでしょうか。》

(『前掲書』)

結局、中川氏の目標は、ルソー、スタンダールという西欧近代の哲人たちのもっていた「自我の防壁の破れ」がもたらす「忘我」の境地からする「永遠の幸福」の確認ということになるのであるろうか。そして、こうした「幸福観」の設定こそ、昨今問題になっている「西欧近代的自我構造問題」への中川氏流の解答である。

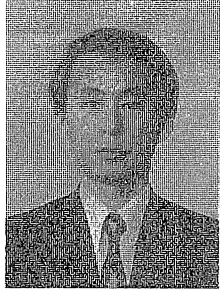
4

実は、僕はこれまで述べて来たことを通して、人間の一生と、若き日々の行動や思いが、深いつながりや関係を持っていることを示そうとしてきた。中川氏にあっ



## 著者略歴

中川 久定 (なかがわ ひさやす)



1931年 東京に生まれる

京都大学文学部仏文学科卒業

同大学院修士課程修了 文学博士

現在 京都大学文学部仏文科教授

主著 *Diderot, Essai sur Sénèque*, 2 vol.

『自伝の文学——ルソーとスタンダール』岩波新書

『デイドロのセネカ論』岩波書店

『人類の知的遺産41 デイドロ』講談社

『甦るルソー』岩波書店

他多数

## デイドロの〈現代性〉

定価 400円

1986年10月25日 第1刷発行

著者 中川 久定

解説 牧野 剛

装幀 谷川 晃一

発行 河合文化教育研究所  
〒464 名古屋市千種区今池2-1-10発売 (株)進学研究社  
〒464 名古屋市千種区今池2-4-3  
TEL (代)052-735-1575

●印刷・製本 (株)刈谷高速印刷

ては、それはデイドロ、ルソーの研究という、限定的な場面ではあるが、確かに、そうしたことを思わせるものが多く存在することは、これまでの展開によってお分りになったであろう。

そして、そうしたデイドロ研究の、中川氏流のまとめが、ここで展開された「デイドロの〈現代性〉」という講演である。ここでは、氏の理解されたデイドロ問題が、長期間の醸成の時を経て、わかりやすく述べられている。ここでは、僕が「たなくも」紹介しようとした中川氏の精神のあり方が、デイドロを語ることという形で、みごとに展開されていると思える。